

青島・折生迫地区

あおしま

① 青島

日南海岸国定公園の最北端に位置する低平な小島で、周囲約1.5km、面積約4.4ha、最大標高は5.7mで、波蝕台の上に堆積してできた貝殻泥砂によってできています。

古くは「淡島（あわしま）」「齒染の浮島（しだのうきしま）」「鴨就島（かもつくしま）」とも呼ばれ、山幸彦・海幸彦の神話伝説の舞台として知られています。

今では陸続きの半島のようにっていますが、かつては沖に浮かぶ小島でした。『日向記』によれば、天文年間（1532-55）に伊東義祐が飢肥へ遠征した際「薄霧ノタエマヲ見レハ秋風ニ残ル梢ヤ青島ノ松」と詠んで、磯伝いに進んだと記されています。また、『上井覚兼日記』の天正13年（1585）6月11日条には、上井覚兼・鎌田兼政らが船で青島に行き、水練などをして遊んだことが記されています。



あおしまあねったいせいしょくぶつぐんらく

📷 青島亜熱帯性植物群落（国特別天然記念物）

島内は28種類の亜熱帯性植物で覆われ、特に群落の80%を占めるビロウ群落は、世界で最も北にあるビロウの純林として、とても名高いものとなっています。



あおしまのりゅうきかいしょうときけいはしょくこん

📷 青島の隆起海床と奇形波蝕痕（国天然記念物）

通称「鬼の洗濯板」と呼ばれる青島の地層は、砂岩と泥岩の累層が隆起しながら傾斜して平坦化したものと考えられています。また、亀甲状の亀裂は形成時の乾燥によるもの、無数の甌穴は穿孔貝によるものと考えられています。



あおしまじんしゃ
青島神社

青島神社は、青島の中央にあり、アマツヒダカヒコホホデミノミコト・シオヅツノオオカミ・トヨタマヒメノミコトを祭神として祀っています。

創建は不詳ですが、文明13年（1481）に伊東祐堯が所堂3斗5升蒔・所田3斗5升蒔の計7斗蒔を寄進したと伝え、文亀3年（1503）のものなど棟札9枚が残されています。

古くは「青島大明神」「鴨就青島宮」とも称し、明治維新の際に青島神社と改称されました。

江戸時代には飢肥藩主の崇敬厚く、霊域であったため、島奉行を置いて島中及びその近辺を監視させ、島への牛馬の渡島や発砲を厳禁するなど、一切の汚穢を警戒しました。

7月下旬に執行される祭礼は「海を渡る祭礼」と呼ばれています。祭りの中心は、神輿が対岸の折生迫に渡御し、天神社に仮泊する浜下りで、以前は22歳の若者たちによって奉仕されていました。



民俗芸能 海を渡る祭礼浜下り唄

まつぞえかいづか
② 松添貝塚

青島海岸の西、標高6m前後の沖積地に松添貝塚があります。縄文時代後期から晩期にかけて（紀元前150年頃）の大規模な貝塚で、昭和28年・同42年の発掘調査では、サザエやハマグリ等の貝類を始め、鳥獣類や魚類の骨、くじらの骨、土器・石器等が出土しています。



あおしまむらこふん
③ 青島村古墳（県史跡）

青島歴史文化の広場公園の一角とその東の小高い丘には、古墳時代後期のものと推定される青島村古墳があります。青島村古墳として、円墳5基が県の文化財指定を受けていますが、現在確認できる2基についても、ほとんど墳丘の形をとどめていません。



しわすざきじょうあと
④ 紫波州崎城跡

紫波州崎城は、青島の南、海岸に突き出した城山（じょうやま）の山頂にあり、東は日向灘に面し、西は突浪川が流れる要害の地でした。

『日向記』によれば、文安元年（1444）の城主は長井式部少輔であったが、伊東祐堯が当城の明け渡しを望んだため開城し、後に川崎五郎左衛門良正が地頭に任じられています。

島津領となってからは、宮崎地頭上井覚兼の父 薫兼が城主となり、覚兼も度々当城を訪れています。

元和元年（1615）、伊東祐慶のときに廃城、現在は、本丸跡に仏舎利塔が建ち、空堀等の遺構が残されています。



ほりきりとうげ
⑤ 堀切峠

鰐塚山地から日南海岸へ抜けると、海拔150m程の切り通し道路の眼下に、広大な太平洋の眺望が開けてきます。

堀切峠は、大正年間に開通し、当時の宮崎市と内海をつなぐ主要交通路となりました。

道路脇には、フェニックスを始めとする亜熱帯性の植物が並び、宮崎ならではの南国イメージを呈し、宮崎を代表する観光名所となっています。



うどかいどう
⑥ 鵜戸街道

宮崎市中村町から城ヶ崎、赤江、本郷南方、郡司分、熊野、折生迫と海岸沿いに南下する鵜戸までの十一里十二町（約45km）と、飢肥城下から鳥居峠を越えて鵜戸にいたる三里八町（約13km）の道筋を鵜戸街道といい、江戸時代には鵜戸神宮往還と呼ばれていました。

現在その名残りはほとんど見ることはできませんが、曾山寺から折生迫にいたる国道220号線や青島中学校付近から南に向かう峠道が鵜戸街道といわれています。



けいびんてつどうあと

⑦ 軽便鉄道跡

明治時代、大型汽船が登場し、河口港である赤江港への寄航が不可能になると、新たな寄港地として内海港が着目されるようになりました。このため、明治44年（1911）に宮崎軽便鉄道株式会社が設立され、大正2年（1913）には赤江と内海を結ぶ軽便鉄道が運行を開始しました。

軽便鉄道は内海地区に繁栄をもたらすだけでなく、日豊本線の全線開通に先立って開通したこともあって人々の暮らしの改善に大きく貢献しました。

その後、会社は昭和18年（1943）に宮崎交通株式会社に吸収され、さらに、日南線鉄道敷設工事の進展に伴い、昭和37年（1962）に国鉄に買収され、その歴史に終止符を打つことになりました。



ひのみさきかんのんじ

⑧ 日之御崎観音寺

白浜海岸の南、御崎と称される岬の北西麓に日之御崎観音寺があります。開山の年月は不詳ですが、古くは真言宗で御崎寺と称し、推古天皇の時代に百済の僧日羅上人が開いたと伝えられ、往古よりの名刹として日向七堂伽藍の一つに数えられています。

『日向記』によれば、永禄10年（1567）島津忠良が伊東義祐に真幸口（現えびの市）での合戦の和談を申し入れるため、坊津（現鹿児島県加世田市）の一乗院を使僧として遣わし、御崎寺に着船したと伝えられています。

江戸時代の寺領は22石6斗、明治5年（1872）に廃寺となりましたが、その後、曹洞宗の雲海山日之御崎観音寺として再興されました。



あかうみがめおよびそのさんらんち

⑨ アカウミガメ及びその産卵地（県天然記念物）

アカウミガメは、ウミガメの一種で甲長65～100cm程、甲羅の色が赤褐色であることからそのように呼ばれています。太平洋、大西洋、インド洋、地中海に広く分布し、そのうち太平洋を回遊する個体群が毎年5月から8月にかけて本州中部以南の海岸に産卵のため上陸します。

その中でも宮崎市の海岸は全国でも有数の上陸数を誇り、市街地のすぐそばで大型の野生動物が確認できる、とても貴重な場所となっています。



あおしまうすだいこおどり
〈民俗芸能〉 青島臼太鼓踊り（県無形民俗文化財）

青島臼太鼓踊りは、飢肥藩主伊東祐兵が豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した際、敵の包囲網を突破するために敵を脅し、味方を鼓舞するため踊ったのが始まりと伝えられています。

宝永4年（1707）、飢肥藩から盆踊りとして公許されると、青島臼太鼓踊りと呼ばれ伝承されるようになりました。

鬼面と赤白青の紙で彩った蓑を付け、歌・太鼓・鉦の音にあわせて円形に廻りながら踊ります。



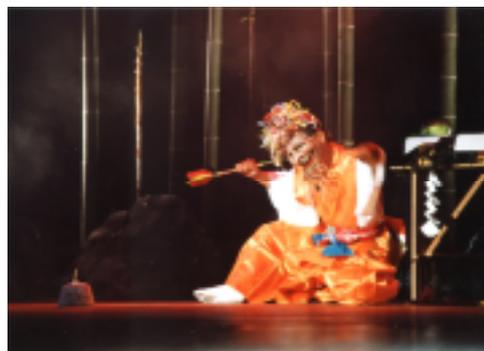
内海地区

のしまじんじゃ
⑩ 野島神社

野島神社は、古くは白鬚大明神と呼ばれ、明治5年（1872）に年ノ神社と大將軍社を合祀した際に野島神社と改称しました。

塩筒大神（しおづつのおおかみ）、猿田彦神（さるとひこのかみ）他3神を祭神として祀り、社蔵の棟札には、文安3年（1446）に創建し、貞享2年（1685）、明和6年（1769）に社殿の再建を行ったことが記されています。また、『上井覺兼日記』には、天正13年（1585）11月15日に伊比井社参詣の帰りに野島白鬚大明神大宮司宅に宿泊し、翌日同社を参詣していることが記されています。

当社には創祀を物語る縁起が残されており、これが『浦島子伝』『扶桑略記』と結びつき、「浦島太郎伝説」として今に語り継がれています。



民俗芸能 野島神楽（市無形民俗文化財）

うちうみのあこう
📷 内海のアコウ（国天然記念物）

野島神社の境内には、国指定の天然記念物であるアコウが3株あります。

アコウは和歌山県を北限とする亜熱帯性のクワ科の高木で、多数の気根を出し、中には幹のように太く成長するものもあります。

社殿の東山斜面にあるアコウは、南東方向に約40m、南西方向に20mと特に枝の広がり大きいことで有名です。



うちうみのやっこそうはっせいち

⑪ 内海のヤッコソウ発生地（国特別天然記念物）

国道220号線の西側、人家の裏山にヤッコソウの発生地があります。

ヤッコソウは四国・九州の南部及び沖縄に分布する珍種で、スダジイの木に寄生し、10月から11月にかけて発生します。名前の由来は、鱗片状の葉を広げたその姿が江戸時代の奴さんに似ていたことから付けられました。

内海のヤッコソウは、明治42年（1909）に発見され、それ以来、発生固体数の多さと規模の大きさが注目されていましたが、平成5年の台風で寄生木のスダジイが倒木し、平成17年から発生が見られなくなりました。



うちうみあまごいたいこ

〈民俗芸能〉 内海雨乞い太鼓

昭和2年（1926）頃に木花・木崎地区より伝えられた内海雨乞い太鼓は、田植えや稲を育てる時期の雨が少ないときに、五穀豊穰と雨が降るように祈って演奏されていました。

昭和30年頃には一度途絶えてしまいましたが、平成11年に地区の人たちの手によって復活し、現在では郷土の芸能として内海小学校の子どもたちに受け継がれています。



もりやまじんじやなつまつりいわいうた

〈民俗芸能〉 守山神社夏祭り唄

港町である内海では、大正年間から海上安全と豊漁を祈願して、毎年地区総出の夏祭りが行われるようになりました。

祭りでは、内海の産土神を祀る守山神社で神事が行われた後、あばれ神輿が町を練り歩きます。あばれ神輿の振り付けとなるこの祝唄は、港町ならではの明るくめでたい歌詞で、男性的でこぶしのきいた唄となっています。祝唄の原形となった神輿と唄は、江戸時代に所属した加江田村から伝わったと言われています。



うちうみとうげじょう

⑫ 内海峠城

内海に向かう古道の峠の西方に、応永30年（1423）に伊東祐立が築いたと伝えられる内海峠城があります。

内海峠城は、南方に対する防御線を成し、文明年間（1469-87）頃まで、島津氏との攻防が繰り返された地です。

標高175mの山頂付近に平坦地が残っています。

